

性の多様性に関する教育実践の国際比較

International Comparison of Educational Practices on Sexual and
Gender Diversities

戸口太功耶, 葛西真記子

TOGUCHI Takuya and KASAI Makiko

鳴門教育大学学校教育研究紀要

第 30 号

Bulletin of Center for Collaboration in Community

Naruto University of Education

No.30, Feb., 2016

性の多様性に関する教育実践の国際比較

International Comparison of Educational Practices on Sexual and Gender Diversities

戸口太功耶*, 葛西真記子**

*〒673-1494 兵庫県加東市下久米942-1 兵庫教育大学大学院 連合学校教育学研究科

**〒772-8502 徳島県鳴門市鳴門町高島字中島748 鳴門教育大学

TOGUCHI Takuya* and KASAI Makiko**

*Doctoral program student of the Joint Graduate School in Science of School Education, Hyogo University of Teacher Education
942-1 Shimokume, Kato-shi, Hyogo 673-1494, Japan**Naruto University of Education
748 Nakajima, Takashima, Naruto-cho, Naruto-shi, 772-8502, Japan

抄録：本研究は、日本内外の性の多様性に関する教育実践の特徴をつかみ、その比較によって、海外にはない日本の独自性と、海外から日本に取り入れることの応用可能性を見出すことが目的であった。方法は文献レビューとし、日本と、海外の中でも先進的な内容かつ、WEB上に公開され、参照が容易であるアムステルダム、アメリカ、スコットランド、オンタリオのそれぞれの実践案と対応指針に関する文献を対象とした。結果、日本の実践の方法は、①批判的思考の訓練、②知識の獲得、③技術と態度の改善、④実体験の理解のいくつかの要素で構成されていることがわかった。海外では、より学級や学校の風土に関与し、周囲を支援者であるアライとして巻き込んでいく方法がとられやすいと考えられた。日本における実践の独自性は「性の多様性に対する理解の促進」に関する実践、海外からの応用可能性は「学校内外の環境への働きかけ」に関する実践であった。

キーワード：性の多様性、セクシュアル・マイノリティ、クィア、LGBT、教育学、心理学

Abstract : This study aimed to reveal the uniqueness of Japanese educational practices in the field of sexual diversity and to explore the applicability of foreign practices to the Japanese educational system. Reports on actual practices and the related policies of Japan, Netherlands, and the United States, Scotland, and Canada were reviewed for the accessibility of their documents online as well as for their advancement in the field. Elements such as 1) critical thinking training, 2) knowledge acquisition, 3) improvement of skills and attitude, and 4) understanding of real experiences were found to constitute Japanese educational practices. Foreign practices were unique in their promotion of engagement in the classroom or school environment to facilitate the involvement of related people as allies. In short, the uniqueness of Japanese educational practices lay in the promotion of the understanding of sexual and gender diversity, and the applicability of foreign education practices was found relevant to the approach to the environment within and outside of the school.

Keywords : sexual and gender diversity, sexual minority, queer, LGBT, pedagogy, psychology

I. 現代における性の多様性に関する動向

現代社会は、性の多様性に関する人権の擁護、啓発、推進として、いまや急速に変化する真只中にある。2015年4月1日には、渋谷区から、「渋谷区男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例」が施行された（渋谷区、2015）。本条例の第4条「性的少数者の人権の尊重」に、性的少数者の人権を尊重する社会を推進する旨が掲げられている。とくに、その第4条の第3項には、「(3)

学校教育、生涯学習その他の教育の場において、性的少数者に対する理解を深め、当事者に対する具体的な対応を行うなどの取組がされること」と、学校教育の場に対しても具体的に言及されている。

同日、法務省からは、人権啓発ビデオ「あなたがあなたらしく生きるために 性的マイノリティと人権」が公開された（法務省、2015）。レズビアン（Lesbian）、ゲイ（Gay）、バイセクシュアル（Bisexual）、トランスジェンダー（Transgender）、クエスチョニング（Questioning）の

頭文字で総称される LGBTQ のそれぞれの性のあり方を説明した上で、性同一性障害と同性愛のそれぞれのケースがドラマ化され、それに対する専門家による解説や、現状に関する説明等が組み込まれている。このように、用語説明、事例、現状と分かりやすく構成されている。なお、昨今では、LGBTQ という表記よりも、日英 LGBT ユース エクスチェンジ プロジェクト (YEP) 実行委員会 (2009) や、日高 (2013)、塩安 (2014) に見られるように、LGBT という表記が多く用いられ始めている。

さらに、同年 4 月 30 日には、文部科学省より、「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」が発表された (文部科学省, 2015)。「学校において適切に対応ができるよう、必要な情報提供を行うことを含め指導・助言」を要請する趣旨として、「性同一性障害に係る児童生徒についてのきめ細かな対応の実施に当たっての具体的な配慮事項等」がまとめられている。なお、「この中では、悩みや不安を受け止める必要性は、性同一性障害に係る児童生徒だけでなく、いわゆる『性的マイノリティ』とされる児童生徒全般に共通するものであることを明らかにした」とされる。

2015 年の海外における大きな出来事として、6 月 26 日に、アメリカの連邦最高裁判所が、同性婚を憲法上の権利として認めたことを挙げないわけにはいかないだろう。この判決により、全米で同性婚が可能となった (The Huffington Post, 2015)。このような社会動向の中、日本における教育実践においても、きちんと性の多様性を扱っていくことが必要である。

本稿で取りあげる性の多様性に関する言葉を先に定義しておく。本稿では、セクシュアル・マジョリティ (性的多数者) を、ヘテロセクシュアル (異性愛) であり、シスジェンダー (出生時に割り当てられた性別と、生きている性別あるいは生きようとする性別が、等しいあり方) であり、モノアモリー (交際/恋愛/婚姻/性交といった関係性において、一対一の関係性を望むあり方) である人々と定義した上で、セクシュアル・マイノリティを、セクシュアル・マジョリティではない人々と定義する。また、各媒体や文献により表記方法が異なっているが、本稿では、「セクシュアル・マイノリティ」、「セクシャル・マイノリティ」、「性的マイノリティ」、「性的少数者」、これらの表記は全て同一の意味、すなわちセクシュアル・マイノリティを指し示すものであるとして取り扱っていく。

セクシュアル・マイノリティを、セクシュアル・マジョリティではない人々、すなわち補集合として説明したように、セクシュアル・マイノリティには様々な性のあり方が含まれる。例えば、恋愛感情/性的欲求の所在をめぐる性的指向に関しては、レズビアン (女性同性愛)、ゲイ (男性同性愛)、バイセクシュアル (両性愛)、ポリセ

クシュアル (複性愛)、パンセクシュアル (全性愛)、アセクシュアル (非性愛)、ノンセクシュアル (無性愛) といった性のあり方がある。そして、出生時に割り当てられた性別に対して、どのような性別で生きようとするのかという面では、トランスジェンダー (出生時に割り当てられた性別と、生きている性別あるいは生きようとする性別が、異なるあり方)、Xジェンダー (生きている性別あるいは生きようとする性別が、女/男いずれかではないあり方) といった性のあり方が挙げられる。そして、他者とどのように関係性を築くのかという面では、ポリアモリー (交際/恋愛/婚姻/性交といった関係性において、複数との関係性を望むあり方)、ノナモリー (交際/恋愛/婚姻/性交といった関係性のいずれかにおいて、関係性を築かないことを望むあり方)、マルチアモリー (交際/恋愛/婚姻/性交といった関係性において、関係を築く他者に対して多様に対応するあり方) が挙げられる。

しかし、現状として「同性愛や性同一性障害など性的少数者『LGBT』 (読売新聞, 2015)」という記述が、現代日本の社会的な言説となっている。これに見えるのは、特定の平易な語句を組み合わせ、他の様々な差異を不可視化しながら、限定的な意味の範囲で、ある集合体が言及されるという記述の形式である。この社会的に主流となっている言説に対して、多様な性のあり方が特定のあり方に代表されずに、まさしく多種多様であることを明示的に教育で扱っていかなくてはならない。

現代社会の動向を捉えるところ、教育において、セクシュアル・マイノリティについての知識と情報が求められていることが分かる。知識と情報が求められているということは、それらを伝える方法と戦略を検討していくことも必要とされる。一方、メディアを通して、アメリカやカナダといった先進国における性の多様性のあり方が紹介されるように、実践がよりよく行われている海外の地域の方略も検討し、その応用可能性について、日本の教育に活かすための研究を推し進めることも必要である。そして、応用することだけではなく、日本の性の多様性に関する教育実践の独自性を見出し、今後の取り組みの中で特長を伸ばしていくことも必要である。

II. 本研究の目的と方法

1. 目的

本研究は、日本内外の性の多様性に関する教育実践の特徴をつかみ、その比較によって、海外にはない日本の独自性と、海外から日本に取り入れることの応用可能性を見出すことを目的とした。

本研究は、セクシュアル・マイノリティに関する教育実践の展開を促進することができる点で意義があると考

えられる。また、本稿で取り上げられる教育実践は、教員による子どもへのベクトルのみならず、教員への研修、教員と子どもと保護者への教育、カウンセラーによる心理教育、カウンセラーへの研修など、幅広い範囲の活用を期待している。さらに、この性の多様性の教育実践を検討していくことは、教育領域のみならず、医療、福祉、保健、看護といった対人援助に関わるものまで応用できることと展望される。

2. 方法

本研究の方法は、文献レビューである。日本における教育実践の全体的な特徴を捉えるため、まず、日本の学術雑誌に掲載されている論文や報告をまとめることとした。ここでは、授業、研修、プログラムなどを扱った論文や報告を対象とした。実際には学校の授業、講演会、研修などで行われたものが数多く存在し、それらの検討を望むことが求められるが、参照と対象範囲の設定が困難であるため、現実的な範囲として文献を対象とした。

次に、具体的な教育実践の方略について、日本と海外の文献として、性の多様性に関する教育実践の方略が網羅的に掲載された文献（書籍や対応指針に関するパンフレットなどを含む）を対象に、文献レビューを行った。

文献レビュー（Literature review）とは、「自身の領域における研究と理論に関連した、広範囲な参考文献の所在を示す、論文の一部をなすものである（Ridley, 2012）」が、大木・彦（2013）が検討したように、文献レビューは、「一定の手順と技術に基づいて実施される、それ自体が独立した研究方法論」である（大木・彦, 2013）。本研究では、これにならい、性の多様性を扱った教育実践に関する文献において、記述の情報量が各々比較可能な程度に十分であると見られた、日本における実践に関する文献と、内容が先進的であると判断され、かつ誰でも参照可能なかたちとしてインターネットのWEB上でPDFファイルを取得可能であった、アムステルダム、アメリカ、スコットランド、オンタリオにおける文献を比較することとした。

収集した文献は、日本において、WEB上で入手可能な冊子状の資料を4件、学術雑誌に掲載されたものを11件、具体的な実践としての書籍1件であった。アムステルダム、アメリカ、スコットランド、オンタリオはそれぞれ1件ずつ、より網羅的な文献を対象とした。

III. 日本における教育実践

1. 実践の検討

1) 教職員向けの資料の構成

まずは、日本国内で刊行されている、性の多様性に関するいくつかの資料について検討していく。

教職員のためのセクシュアル・マイノリティサポートブック制作実行委員会（2014）が制作した、「教職員のためのセクシュアル・マイノリティサポートブック（改訂版）」では、性をどう考えるか、用語解説、カミングアウトとアウティング、メンタルヘルス、学校生活の中での支援、家族への支援、将来に向けて、性行為感染症といった内容で構成されている。

日英LGBTユースエクステンジプロジェクト（YEP）実行委員会（2009）が制作した「子どもと親と教員のためのLGBT入門ガイド」では、LGBTとは、日本のLGBTユースの状況、当事者の体験、親と教員のケーススタディ、参考図書／映画／サイト紹介、LGBT支援団体リスト、電話相談機関リスト、といったもので構成されている。

日高（2013）による「教員5,979人のLGBT意識調査レポート（PDF）」では、いじめと不登校、自殺などのLGBTの子どもたちの実態と、LGBTの状況と理解に関する教員の意識調査の結果が報告されている。

大阪府教育センター人権教育研究室（2014）では、人権教育リーフレットとして、「セクシュアル・マイノリティの人権」が刊行されている。

2) さまざまな実践の例

次に、実際に行われた実践を検討していく。方法の項でも先述したが、検討を行った実践は文献上で確認されたもののみである。ここに挙げた実践以外にも、学校の授業や講演会などで行われた実践はいくつもあると考えられるが、現実的に検討可能な範囲の文献を対象とした。

高田が行った実践では、高校、当事者による講演、予備知識、家族とは何かについてのワーク、人権について家族法の解釈をめぐる（高田, 2004）といったものを扱っていた。

大東学園では、総合科目「性と生」の授業を、女子校時代の10年以上前からの実践の蓄積の上に、共学後は男女別クラスの工夫、その際に2つの性別に必ずしも分けられるものではないことへの配慮など、担当教員がチーム内で話し合いながら試行錯誤して行っていた（橋本, 2009）。

永田（2010）は、クィア概念を国語化教育に導入することによる有効性を提起している。この研究では、クィア概念において重要とされる①「性的マイノリティをめぐる問題が基盤になる」、②「アイデンティティや、ジェンダー／セクシュアリティの二項対立を問題化する」、③「『自分らしく生きよう、そういう社会を実現しよう』という当事者性を重視する」、これらの3点が確認された。そのうち、①の観点より、「性的マイノリティを積極的に取り上げることにつながり、性的マイノリティのエンパワメントが期待できるようになる」ことを提案している。

②の観点からは、「性の多様性を重視した研究や実践が取り組まれ、異性愛主義が『隠れたカリキュラム』として働くことに対し、異議を唱えることができる」ことを提案している。そして、③の観点からは、「被害者であり加害者であるという両義的な当事者性」の観点による意義として、「学習者にとって性的マイノリティの問題が『ひとごと』であることをゆるさない」こと、すなわち、加害者性も被害者性も誰でも持つということを意識することによって、問題を認識可能となり、エンパワメントに繋がるということを提案している（永田，2010）。

葛西・岡橋（2011）は、LGB Sensitive カウンセラー養成プログラムを開発した。このプログラムでは、自己や他者への気づき、性的指向やLGBに関する正確な知識の提供、カウンセリングの実践に関するスキルの3つの側面で構成された。

渡辺（2012）は、高校1年生における総合学習において、「人間の性と生」を週1時間設けて実践を行った。成果と課題として、①映像資料の効果、②授業順序にみる課題、③多様な性についての理解、④他のテーマとのつながり、とされた（渡辺，2012）。

田代・渡辺・良（2013）は、中学校の6時間の性教育の中の2時間を、多様なセクシュアリティにあてて実践を行った。セクシュアル・マイノリティが特別な存在ではなく、自分たちも多様な存在の一人であることにつながる授業を目指したとされる（田代・渡辺・良，2013）。

松井（2014）は、性的マイノリティを視覚的に伝えていく方法として、白と黒の液体を混ぜたものを見せる実践を行った（松井，2014）。

宮崎（2014）は、「生きている人間を『本』に見立て、図書館で本を読むように、『本』の語りを聞き、対話することによって理解を深める試みである」ヒューマンライブラリーの実践を報告している（宮崎，2014）。

塩安（2014）は、小学生向けのDVD「いろんな性別～LGBTに聞いてみよう～」を作成した。LGBTについて知り、全ての人が自分の性別について考えることを促す作りになっているとされる。ワークシートと教師用の指導案がウェブサイトダウンロードできるようになっている（塩安，2014）。

杉山（2015）は、保健医療福祉専門職への性的マイノリティ支援に関する教育研修を実施した。内容は、講義として①セクシュアリティの基礎知識と、②同性愛者の異性愛社会で直面する困難、専門職としての支援のあり方、③同性愛者とともに働く視点といった3つと、どのような気づきがあったり認識を持ったりしたのかに関するグループワーク、映像視聴、参加者間の意見をまとめていくワールドカフェ、これらで構成された（杉山，2015）。

青木と榊原，長嶋（2014）は、医学部1年生を対象に、

医学入門講座（5～7月，90分×15回）の1回で、性的マイノリティについての授業を行った。講義の内容は、まとめると、性の要素について、セクシュアル・マイノリティとは、妊娠についてといったもので構成されていた（青木・榊原・長嶋，2014）。

戸口・葛西（2015）が報告したクィア・ペダゴジーを導入したカウンセリング心理学では、クィア理論より派生した教育学としてのクィア・ペダゴジーをカウンセリング心理学に応用し、カウンセラー養成における性の多様性に関する実践を提案している。

これらのことから、教育に限らず、心理、医療、福祉、保健の領域でそれぞれ実践されていることが分かる。また、その実践の方法は、それぞれが工夫をこらし、情報を受ける側に分かりやすいように努められていた。知識を伝える方法以外にも、対人的なやりとりや視覚的な情報の受け取りによって理解を促進していたことが特徴的とも言える。重要なのは、実践を受けてどのように感じたか、思ったかを、情報の送り手と受け手の間で相互にやりとりがなされ、すり合わせが行われることである。

3) 具体的な実践の例

先の実践の例群では、それぞれがかなり圧縮された情報となったが、次に、具体的な実践例を取り上げよう。特定非営利活動法人 ReBit による『LGBTってなんだろう？』（薬師・古堂・小川・笹原，2014）の中には、ReBit が行なってきた授業実践報告が掲載されている。ReBit は、大学生などを中心とした NPO 法人であり、2014年9月時点で120回以上出張授業等を行なってきており（薬師・古堂・小川・笹原，2014）、実践の経験が積まれている。そのため、具体的な実践の例として取りあげるにあたって妥当であると考えられた。報告では、以下のような内容となっている（表1）。

さらに、小学生向けの授業実践としては、ReBit のメンバーが教育実習でおこなったものが記載されている。用いられた資料は『いろいろかぞく』（作・絵：トッド・パール，訳：ほむらひろし，フレーベル館，2005年12月）であった。ねらいは「絵本でさまざまな形の家族に触れることを通して、『家族』との関係には何を大切にしたいかを考え、ありのままの自分の家族、そしてありのままの自分を認められるようなきっかけを掴む」とされる。具体的な授業内容を表2と表3に引用する。

ReBit の中・高・大学生向けの実践では、知識、当事者による語り、カミングアウトを切り口にしたトークとワークといった構成と見ることができる。基本的な用語を説明し、言語を共有した上で、実際的な当事者はどのような体験をしているのかをその言語を通して知り、そこから、実際にこれから当事者と関わっていく場合の実質的なイメージを練成すること、といったように、一貫

表1 ReBitによる中・高・大学生向けの授業概要
(本文をもとに詳細を追加)(薬師・古堂・小川・笹原, 2014)

| | 概要 | ラップ | 内容 |
|---|-----------------------|-----|---|
| ① | 講義 | 15分 | LGBT 基礎知識について ねらい: LGBT について知る |
| ② | グループワーク 1 ライフストーリー | 25分 | LGBT の学生による自身のセクシュアリティ説明、 学校生活(小学校~大学) 振り返り ねらい: LGBT の人と出会う |
| ③ | トークセッション | 10分 | カミングアウトをテーマにしたトーク ねらい: 「LGBT の人」と「LGBT でない人」のかかわりあいについて考える |
| ④ | グループワーク 2 フリートーク | 20分 | 「LGBT の人とのかかわり合いについて」をテーマにした質疑応答・対話 ねらい: これからの自分について話し合う |
| | 質疑応答 | 10分 | 全体での質疑応答 |
| ⑤ | まとめ アンケート | 10分 | 授業の終息・アンケート記入 |

表2 授業内容
(薬師・古堂・小川・笹原, 2014)

| |
|---|
| ①ワークシートの中で自分が家族であると思うものに丸をつけ、発表する。(15分) |
| ②家族とはどんな人たちのことか考え、発表する。(10分) |
| ③資料を一読し、登場した家族の中で気になったものを、理由と合わせて発表する。(10分) |
| ④これから大切にしたいことを考えながら、授業の感想を書く。(10分) |

表3 ReBitのメンバーによる授業の中での伝え方
(薬師・古堂・小川・笹原, 2014)

| |
|-------------------------|
| ①性教育(保健体育) |
| ②人生設計(道徳・家庭科・総合的な学習の時間) |
| ③英語の時間 |
| ④道徳の時間 |
| ⑤総合的な学習の時間 |
| ⑥ホームルーム |

したアプローチだと考えられる。小学生向けの実践では、様々な家族の描かれ方を通して、そこから多様性を感じていくことが背景の方略として考えられる。授業の中での伝え方では、保健体育、道徳、家庭科、総合的な学習、英語といった科目が示された。この実践の時点では、そ

他の科目である、国語、数学、理科(化学、物理、生物、地学)、社会(歴史、地理、公民)、芸術(美術、音楽、書道)といった種々の教科でいかに性の多様性を盛り込むことができるのかが課題である。

2. 実践の方法のまとめ

日本の性の多様性に関する実践を見たところ、多くが、独自の経験に基づいて工夫されたものである可能性が見えてきた。しかし、それらの実践は、他の様々な実践や、各々の背景となる理論を踏まえた上で、自己の対象となる実践の範囲に沿って、再編成、そして洗練されている可能性が大いにありうる。例えば、葛西・岡橋(2011)のLGB Sensitive カウンセラー養成プログラムの開発は、「Pedersen の多文化理解の訓練課程を参考に構成した」と記述があり、永田(2010)の国語科教育におけるクィア概念の導入は、背景にクィア・スタディーズがある。このように、各々独自の基礎となる論理が存在する。そのため、何が優れているかという側面で検討するよりかは、どのような方法をとるのが実施する文脈に応じてケースバイケースとなりうることで、それぞれの実践を統合的に検討していくことが必要であろう。日本における実践において扱われる要素を表4にまとめた。

表4 日本の実践の方法のまとめ

| |
|--|
| ①批判的思考の訓練 気づき、前提にしていることに気づくこと、ジェンダーとしての性別二元制への問い直し、自分らしさの実現のための課題、人間全体が性の多様性に位置づけられることへの気づき |
| ②知識の獲得 知識、セクシュアル・マイノリティの説明、性の要素、社会で直面する困難、カミングアウト、予備知識 |
| ③技術と態度の改善 スキル、支援のあり方、言葉がけの方法 |
| ④実体験の理解 当事者の体験、当事者のセクシュアリティの説明や学校生活、不快なことの共有 |

3. 実践の形式のまとめ

これまでの性の多様性に関する実践の形式は、①レクチャー形式、②ワークショップ形式、③ゲストスピーチ形式の3つにまとめられると考えられる。

多くは授業・講義・講演といった①レクチャー形式と言えるだろう。この形式では、語彙、用語、状況、理論といった知識を伝えることが可能である。②ワークショップ形式は、道具や身体、思考を用いたり、そこで他者を介在したりといった作業をおこなう。これには、ワークシートの使用、グループディスカッション、ロールプレイ、意見や感想などのシェアリング、ビデオ視聴といったものが含まれてくる。③ゲストスピーチ形式は、

セクシュアル・マイノリティの当事者の体験を実際に聴くというものである。

IV. 日本国外における実践

日本国外における実践として、とくに内容が先進的であると判断された、アムステルダム、アメリカ、スコットランド、オンタリオの実践を紹介する。本稿では取り上げなかったが、これらの他にも、ブラジルにおけるLGBTの権利と教育に関する報告 (Mountian, 2014)、中国 (UNDP, 2014a)、インドネシア (UNDP, 2014b)、ネパール (UNDP, 2014c)、タイ (UNDP, 2014d) における報告など、数々の報告がある。

表5 検討した実践の一覧

| |
|---|
| アムステルダム ●学校で働くためのツール・キット 1.0 (Toolkit Working with Schools 1.0) GALE (Global alliance for LGBT education) より |
| アメリカ ●セーフ・スペース・キット (The Safe Space Kit: guide to being ally to LGBT Students) GLSEN (Gay, Lesbian & Straight Education Network) より |
| スコットランド ●教師のためのツール・キット (Toolkit for Teachers – Dealing with Homophobia and Homophobic Bullying in Scottish Schools) Learning and Teaching Scotland (LTS) より |
| オンタリオ ●ポジティブ・スペース活動キット (Positive space: Take Action Kit) ETFO (Elementary teachers' federation of Ontario) より |

これらそれぞれの文献について概要を示し、それぞれの特徴を検討していく。

1. アムステルダムにおける実践

アムステルダム(オランダ)における実践に関するパンフレットには、GALEの「学校で働くためのツール・キット 1.0 (Toolkit Working with Schools 1.0) (Peter, 2011)」がある。これは、校長のためのツール、教師のためのツール、学生のためのツール、親のためのツールと、対象者に分けて構成されている。校長のためのツールでは、「多様性政策への体系的アプローチ」として、学校の教育上の課題、多様性政策の価値づけ、多様性政策の体系的アプローチ、多様性政策実施のための4段階、遂行の実践案が挙げられ、「LGBTの方針における学校の報告」では、学校の視野、いじめとLGBTいじめにおける視野の共有、ジェンダーに関する教育、差別に関する教育、LGBTへの否定的行為の即時の是正、同性愛嫌悪とトランス嫌悪への明示的な非難、LGBTに関する問題へのカウンセ

ラーの対応、体系的な質の政策、カミングアウトしたときの支援、学校改善の取り組みへの支援、これらが挙げられた (Peter, 2011)。教師のツールは教科ごとに要約し、表にした (表6)。

表6 教師のためのツール
(一部要約し、筆者が作成) (Peter, 2011)

| |
|--|
| 性教育・生物 ：思春期：アイデンティティ、行為、性的魅力について議論、それらは揃うものではないことを説明する。 自然と文化 ：「自然ではないこと」、「自然らしさ」について議論する。 挿入 ：同性同士の性行為と他の性行為のあり方について詳しく議論する。 性同一性 ：性同一性はどのように自然であるのか議論する。 HIVとリスク低減 ：HIV/AIDSはゲイの病気ではないこと。 |
| 言語 ：文学作品のテーマとして扱う。ストレートの人にインタビューする。 |
| 歴史 ：歴史的によく知られているLGBTの人々を挙げる。 |
| 地理 ：異文化のセクシュアリティを扱う。 |
| 市民権と向社会的行動 ：尊重、アイデンティティの発達、雇用、自尊心、社会的相互作用など、あるいは結婚、ゲイプライド、いじめについて議論できる。 |
| 宗教教育 ：宗教の自由、表現の自由、反差別の原則のバランスについて議論することができる。 |
| 他の科目 ：例えば数学の問題で「ピーターがマーシャのためにタイルを貼ります。…(中略)…タイルは何枚必要でしょうか」といった例に対して、サスキアとマーシャ、ピーターとヴィンセントといったように、日常的に取り上げること。 |
| 体育 ：最初に、典型的な性役割に従わない人々の存在を強調すること。 肯定的役割 ：教師は生徒の重要なロールモデルになる。 連携 ：競争だけでなく、協力にも焦点を当てること。 いじめ ：侮蔑したりそれを無視したりせず、反応すること。 スポーツにおける区別と差別 ：典型的な男性あるいは女性のスポーツについて議論する。男性、女性、LGBTができないスポーツの、正当な理由は何か。 |
| LGBTと多様性についての特定のパネルセッション 学校の図書館とイントラネットとインターネット |

また、掲載されている授業での簡易エクササイズはこのツールにおいて特徴的な記載箇所である。これについても表に示す (表7)。

教師のためのツールで特徴的な部分は、それぞれの授業科目について、可能な限りの性の多様性の取り扱いを示している部分である。日本で見られるような、性教育で扱えるかどうかといった議論以前に、種々の科目で扱えることを提示している点で、その可能性をさらに検討したい方略である。

表7 授業での簡易エクササイズ(抜粋)(Peter, 2011)

| |
|---|
| <p>言葉連想ゲーム:「今から言う言葉を聞いたとき、何が思い浮かぶ? レズビアン、ゲイ、バイセクシュアル、トランスジェンダー。黒板かフリップチャートに書いてみて」。10分間、連想の勢いがおさまるまで、学生に自由に連想してもらおう。ネガティブなものまで含めて、全ての連想を書き出す。この段階では何もコメントをしない。学生の能力を評価することを示す。連想が終わったら、開示、共有し、参加したことに感謝の意を伝え、この段階の終わりを伝える。書かれたものを学生とともに見る。関係性、容姿、セックス、といった単語でアイデアを区分する。なぜこれらの言葉を使ったのかを尋ねる。イメージと情報は何か。さらに深くエクササイズを広げることができる。</p> |
| <p>事実と意見のマインドマップ:事実と意見の違いを学ぶ。ワードのマップを作ることによって行われる。30分程度。ライフスタイルの多様性について、新しい洞察を得る。生徒は、個人的意見を作り上げること、事実と意見の違い、感情的であることと論理的であることの違いを学ぶ。</p> |
| <p>ファティマはアドバイスを求む:生徒はファティマにアドバイスするよう求められる。自分の同性愛感情について疑問を持ち、同級生と家族への信用について困っている。異なるアドバイスは個人的意見を反映させる。ディスカッションはそれらの意見の探索とLGBTだと疑う生徒にとっての共感を促進させることに焦点を当てることができる。45分程度。</p> |
| <p>ラップソング制作:生徒はLGBT問題と尊重についてのラップソングを作る。生徒の日常世界から場面や気持ちを描く。現代的なラップの歌詞は多様な学習の資源となる。肯定的な手段として行うことで、若者文化によるネガティブなイメージが修正され、バランスが整う。ラップソングを作ることは、個人的な感情と表現を描くことである。30分程度。</p> |
| <p>私は〜である、私は〜でない:自分たちのアイデンティティについて、ある文章を支持するかどうか求められる。級友の中にいる状態で、独りであることの不快さ、スティグマ化されるリスク、クローゼットに留まりたいという願望を体験する。これは、多様性やLGBT問題に関する授業や訓練を始めるにあたって、短くてパワフルなゲームである。10〜15分。</p> |

2. アメリカにおける実践

アメリカにおける実践のための文献として、GLSEN (2013) の「セーフ・スペース・キット (The Safe Space Kit: guide to being ally to LGBT Students)」がある。なお、GLSEN は、「グリッスン」と発音される (表8)。

GLSEN のセーフ・スペース・キットにおいて特徴的であるのは、アライについて紙面を割いて説明している点であり、冒頭でまずアライについて説明されている。アライとは、「標的とされ、差別を受けてきた個人または集団のために、物申し、立ち上がる個人 (GLSEN, 2013)」と説明される。このキットでは、非当事者の立場からも問題に関わり、いかに状況を改善していけるかという視点において、一貫していると言えるだろう。また、支援

表8 セーフ・スペース・キットの構成 (GLSEN, 2013)

| |
|--|
| <p>問題の認知 (know the issues)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●アライとは何か? ●なぜアライになるのか? ●自身の個人的信念を評価すること ●きちんと話すこと ●用語の一致 (クイズ形式) |
| <p>支援 (Support)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●見えるアライになる ●カムアウトした学生を支援する ●反LGBTな言葉や行為に対応する ●ゲイ・ストレートアライアンスのような学生クラブを支援する |
| <p>教育 (Educate)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●他者の尊重を学生に教える ●LGBTの肯定的な表現、歴史、イベントをカリキュラムに組み込む ●LGBT反対の偏見と、安全な学校作りの方法を他教職員へ提案する |
| <p>擁護 (Advocate)</p> <ul style="list-style-type: none"> ●学校の風土と方針と実践の評価 ●反いじめ/ハラスメントへの包括的な方針の実現 ●非差別の方針と実践の促進 |

の項目では、「ゲイ・ストレートアライアンスのような学生クラブを支援する」といったように、当事者と非当事者を結びつけ、問題の改善へと関連させている。

3. スコットランドにおける実践

スコットランドにおける実践として、LGBT Youth Scotland (2009) と、非省庁型公共機関である、ラーニング&ティーチング・スコットランド (Learning and Teaching Scotland: LTS) による「教師のためのツール・キット (Toolkit for Teachers - Dealing with Homophobia and Homophobic Bullying in Scottish Schools)」を紹介する。覚え書きと付録を含めると、全8章で構成されており、そのうちの5章で「実践の手引き」、6章で「優れた実践案」が掲載されている (表9, 表10)。スコットランド全国の中学校と地方自治体に2009年に配布された。

表9 実践の手引き (Practical Guidance) (LGBT Youth Scotland, 2009)

| |
|--|
| <ol style="list-style-type: none"> 1. 校内の反同性愛嫌悪の取り組みへの障害の除去 2. 言葉の使用 3. 同性愛嫌悪とこれによるいじめへの対応と対処 4. 同僚からの同性愛嫌悪への対処 5. 同性愛嫌悪な出来事に対する記録と監視 6. LGBTの若者への支援 7. 道標と情報 8. 守秘義務と情報共有 9. 反同性愛嫌悪の取り組みへ親や保護者を巻き込む 10. 親や保護者がLGBTである若者 |
|--|

表 10 優れた実践案 (Suggestions of good practice)
(LGBT Youth Scotland, 2009)

1. 学校やコミュニティへ LGBT 問題の自覚の促進
2. 平等権活動グループ
3. 修復の実践
4. LGBT の権利憲章
5. LGBT の歴史月間
6. 学校がこの資源を扱うことの経験

構成としては、実践の下準備、問題への気づきの促進、ヘイトクライムに対する対応、支援、情報共有、保護者の立場の熟慮、といったようにまとめられるであろう。特徴的であるのは、守秘義務を言及していることと、保護者が LGBT である場合までを見据えていることである。子どもとの対話を守る、親の存在を考慮するといった、配慮がよく見られるツールである。

4. オンタリオにおける実践

オンタリオ (カナダ) における実践として、オンタリオ州の小学校教師連盟 (Elementary teachers' Federation of Ontario: ETFO) (2014) が作成した、「ポジティブ・スペース—活動キット (Positive space: Take Action Kit)」を紹介する (表 11)。

ポジティブ・スペースの実践案は、まず、地元の会長や委員会などのリソースを利用することが特徴的である。他の肯定的な空間にすること、アライを含めた活動を促進すること、家族やイベントを支援することなど、アメリカの GLSEN における実践と似た部分が見られる。

表 11 「ポジティブ・スペース」の構成

| |
|---|
| <p>より良くする—より安全にする 始めよう！</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 教員のための能力開発 2. 地元の委員に会う 3. 委員会と共に活動する <p>学校を「肯定的な空間」にする</p> <ol style="list-style-type: none"> 4. 学校を「肯定的な空間」にする 5. 同性愛嫌悪的いじめを排除する <p>「ピンクの日」を促進する</p> <ol style="list-style-type: none"> 6. 「ピンクの日」を促進する 7. GSA*の取り組みを支援／促進する <p>LGBT 家族への働きかけ</p> <ol style="list-style-type: none"> 8. LGBT 家族への働きかけ 9. 地元のプライドイベントを支援する 10. 他の LGBT の取り組み団体を支援する |
|---|

* Gay Straight Alliance student groups の略

5. 実践の方法のまとめ

海外の性の多様性に関する実践の方法の要素は、表 12 にあるようにまとめられる。校外の団体の支援、肯定的な場の創造や、アライの促進、保護者の考慮といったよ

うに、学校内外の子どもを取り巻く環境へのアプローチがよく見られていた。

表 12 海外の実践の方法のまとめ

| |
|---|
| ①教育と学習：全ての教科で扱える。他者の尊重、ジェンダー、差別に関する教育。また、より発展的に、体験を通じたエクササイズで学ぶ。情報共有。 |
| ②問題の認知：学校の風土、個人の信念を評価する。 |
| ③当事者への支援：LGBT の学生、カミングアウトした学生を支援する。 |
| ④校外の団体の支援：地域のコミュニティや活動グループを支援する。地元の議会、議員と共に活動する。 |
| ⑤肯定的な場の創造：学校内でイベントをおこなう、ピンクの日を作るなど、肯定的な空間にする。サークルを支援する。 |
| ⑥アライの促進：非当事者の支援者であるアライを増やしていき、当事者と非当事者の活動を支援する。 |
| ⑦保護者の考慮：取り組みに保護者を巻き込む。また、保護者が LGBT である場合を考慮する。 |
| ⑧差別・嫌悪への対策：同性愛嫌悪、トランス嫌悪、いじめに対する対応。 |

6. 実践の形式のまとめ

実践の形式としては、授業で扱う場合では幅広い科目で扱えることを示していたこと、授業以外にも、簡単なゲームをするようなエクササイズとして用いる方法を示していたこと、学内外のコミュニティの形成と連携、学校全体への働きかけといったアクションが特徴的であった (表 13)。

表 13 実践の形式

| |
|---|
| ①レクチャー：あらゆる科目で性の多様性を扱う。 |
| ②エクササイズ：体験的に認知や理解を促進するために、簡単なゲームなどに取り組む。 |
| ③コミュニティ：アライを含めた性の多様性に関する仲間関係を促進すること。家族、地元のイベントを巻き込んでいく。 |
| ④アクション：周囲を巻き込むようなイベントの企画。環境への働きかけ。地元の委員と対話する。 |

V. 日本の実践と海外の実践の比較

日本における教育実践では、性教育の文脈によるものと人権教育の文脈によるものなど、分野によるアプローチの違いが見られた。また、国語科教育など、教科教育における実践も行われていた。

アムステルダムでは、様々なワークが作成されており、授業による講義よりも、ゲームとして用いることで馴染みやすく学んでいける方法があった。また、全教科にお

ける取り組みが提示されており、広範な実践が行われやすいことが示されていた。

アメリカでは、非当事者をいかにアライへと導いていくかの試みが特徴的であった。セクシュアル・マイノリティの児童・生徒を取り巻く環境への働きかけにより、非当事者の児童・生徒も巻き込んで支援していくことを軸としていると言える。

スコットランドでは、実践する上での障害を取り除き、同性愛嫌悪といったヘイトクライムをいかに認識し、無くしていくかが強調されていた。また、児童・生徒に限らず、教員、保護者におけるセクシュアル・マイノリティの存在を前提にしていた。

オンタリオでは、地域の委員に働きかけつつ、学校の風土や可視化された取り組み、学外の活動も見据えた実践が主立っていた。知識を伝えるだけでなく、学内外を問わず、感覚的に肯定された雰囲気を作ることに焦点を当てていたと見られる。

日本の実践では、授業でいかに扱えるのか、知識をいかに伝えられるか、当事者の語りからどのように理解を促進できるかといった実質的な認知の側面がよく見られていたのに対し、海外諸国の実践では、どのように学校の風土を肯定的にしていくか、アライを含めた肯定的なサークル／クラブのコミュニティ活動をいかに促進するか、どのように親を巻き込めるかなどといったように、環境に対して働きかけるものがよく見られた。したがって、日本の実践における独自性は、性を取り巻く知識の伝達と、当事者による語りといった、セクシュアル・マイノリティそのものの理解であったと言える。そして、海外から日本への応用可能性は、学校風土やアライの存在の促進といった環境への働きかけによる実践であった。これからの日本における実践は、セクシュアル・マイノリティそのものへの理解を試みる特性を引き続き重視しつつ、児童・生徒間、教員間、保護者間といった対人間におけるアライの促進や、学内の風土へ介入していく方法によって、さらに性の多様性が推進していくと考えられる。

アライの促進が日本における課題であるが、それと同時に、アライをいかに議論するかが問われる。アライという言葉の存在の前提には、セクシュアル・マイノリティである者とセクシュアル・マジョリティである者の間の明確な区分がある。すなわち、セクシュアル・マイノリティであるということ（と同時にセクシュアル・マジョリティであるということ）が何を指すのかが問われるのである。ここには、セクシュアル・マイノリティとセクシュアル・マジョリティの間で揺らぎのある者、例えば、バイセクシュアル（両性愛）とヘテロセクシュアル（異性愛）の間で揺らぎを持つ者や、Xジェンダー（女／男いずれかではない性のあり方）とシスジェンダーの間で

揺らぎを持つ者、あるいは、それら二つの揺らぎの混合の状態を持つ者の存在を見落としてしまう問題がある。多様な性に関わる教育実践に正解は無いという認識の上で、今後の展開が望まれると言えるだろう。

本研究の今後の課題は以下の通りである。日本の海外を比較するにあたって、本稿で用いられた文献が、日本では教育に限らない範囲まで収集されたのに対し、海外では教育領域のみの範囲となったため、留意が必要である。また、取り上げた各国の文化的背景に言及し、行われる実践の裏側までさらに掘り下げるようにすることが今後の課題である。

引用文献

- 青木昭子・榊原秀也・長嶋洋治 (2014). 性的マイノリティについての講義を受けて医学科1年生が学んだこと: 感想カードを用いた質的研究. 医学教育, 45(5), pp.357-362.
- ETFO (Elementary teachers' federation of Ontario) (2014). Positive space: Take Action Kit. (URL: <http://www.etfo.ca/Resources/ForTeachers/Documents/ETFO%20LGBT%20Kit%20-%20English.pdf>)
- GLSEN (Gay, Lesbian & Straight Education Network) (2013). The Safe Space Kit: guide to being ally to LGBT Students. New York. (URL: <https://www.glsen.org/>)
- 橋本紀子 (2009). 関東地区1中学, 高校生のセクシュアル・マイノリティの子どもたちと教育に関する研究・実践動向2 男女共学制下のジェンダー平等教育—北関東諸県を中心に (2008年度 地区研究活動報告(1)), 教育学研究, 76(4), pp.474-477.
- 法務省 (2015). 人権啓発ビデオ「あなたがあなたらしく生きるために 性的マイノリティと人権」(URL: <https://www.youtube.com/watch?v=G9DhghaAxlo>)
- 日高康晴 (2013). 教員 5,979 人の LGBT 意識調査レポート (PDF) (URL: http://www.health-issue.jp/teachers_lgbt_survey.pdf)
- 葛西真記子・岡橋陽子 (2011). LGB Sensitive カウンセラー養成プログラムの実践. 心理臨床学研究, 29(3), pp.257-268.
- 教職員のためのセクシュアル・マイノリティサポートブック制作実行委員会 (2014). 教職員のためのセクシュアル・マイノリティサポートブック (改訂版). (URL: <http://say-to-say.com/index.php?%A5%B5%A5%DD%A1%BC%A5%C8%A5%D6%A5%C3%A5%AF>)
- LGBT Youth Scotland (2009). Toolkit for Teachers - Dealing with Homophobia and Homophobic Bullying in Scottish Schools. (PDF) (URL: <https://www.lgbtyouth.org.uk/files/documents/Toolkitforteachers.pdf>)

- 松井美奈子 (2014). 自分も周りの人も否定しない否定されない教育を：小学校における性的マイノリティの教育 松井美奈子先生 (高槻市立桜台小学校) インタビュー. ヒューマンライツ, 316, pp.22-25.
- 宮崎聖乃 (2014). 多文化共生社会を目指す取組みとしてのヒューマンライブラリー-市民活動としてのヒューマンライブラリー実践報告-. 長崎外大論叢, 18, pp.185-200.
- 文部科学省 (2015). 「性同一性障害に係る児童生徒に対するきめ細かな対応の実施等について」 (URL: http://www.mext.go.jp/b_menu/houdou/27/04/1357468.htm)
- Mountian, I. (2014). A Critical Analysis of Public Policies on Education and LGBT Rights in Brazil. Evidence report, 61, pp.1-22.
- 永田麻詠 (2010). 国語科教育におけるクィア概念の導入-エンパワメントとしてのことばの力の育成を目指して-. 国語教育思想研究, 2, pp.31-40.
- 日英 LGBT ユース エクスチェンジ プロジェクト (YEP) 実行委員会 (2009). 子どもと親と教員のための LGBT 入門ガイド (URL: <http://www.endomameta.com/nyuumon.pdf>)
- 大木秀一・彦 聖美 (2013). 研究方法論としての文献レビュー: 英米の書籍による検討. 石川看護雑誌, 10, pp.7-18.
- 大阪府教育センター人権教育研究室 (2014). 人権教育リーフレット「セクシュアル・マイノリティの人権」 (URL: <http://www.osaka-c.ed.jp/jinken/leaflet/pdf/leaf-04.pdf>)
- Peter, D. (editor) (2011). Toolkit Working with Schools 1.0. Tools for school consultants, principals, teachers, students and parents to integrate adequate attention of lesbian, gay, bisexual and transgender topics in curricula and school policies. GALE (Global alliance for LGBT education), Amsterdam. (URL: <http://www.lgbt-education.info/en/home>)
- Ridley, D. (2012). The Literature Review: A Step-by-Step Guide for Students. (2nd). SAGE, Los Angeles.
- 渋谷区 (2015). 渋谷区男女平等及び多様性を尊重する社会を推進する条例. (URL: <https://www.city.shibuya.tokyo.jp/kusei/jorei/jorei/lgbt.html>)
- 塩安九十九 (2014). 学校における LGBT の教育：いつどのように伝えていくか. ヒューマンライツ, 316, pp.16-21.
- 杉山貴士 (2015). 保健医療福祉専門職への「性的マイノリティ支援」教育研修をめぐって：神奈川県民主医療機関連合会 (神奈川県医連) での取り組みから. 福祉教育開発センター紀要, 12, pp.165-179.
- 高田恭一 (2004). 性同一性障害について：安藤大将さんの講演会と現代社会の授業をとおして. 教職教育研究：教職教育研究センター紀要, 9, pp.59-65.
- 田代美江子・渡辺大輔・長香織 (2013). 東アジアにおける性教育の基盤と「性の多様性」を学ぶ授業づくり (【テーマ B-8】 ジェンダーと教育, テーマ型研究発表【B】, 発表要旨). 日本教育学会大会研究発表要項, 72, pp.228-229.
- The Huffington Post (2015). 「同性婚は合憲」アメリカ, 全ての州で合法に ホワイトハウスもレインボーに染まる. The Huffington Post Japan (URL: http://www.huffingtonpost.jp/2015/06/26/supreme-court-gay-marriage_n_7676054.html)
- 戸口太功耶・葛西真記子 (2015). クィア・ペダゴジーを導入したカウンセリング心理学の可能性：カウンセラー養成における実践のための理論研究. 鳴門教育大学学校教育研究紀要, 29, pp.31-42.
- UNDP, USAID (2014a). Being LGBT in Asia: China Country Report. Bangkok.
- UNDP, USAID (2014b). Being LGBT in Asia: Indonesia Country Report. Bangkok.
- UNDP, USAID (2014c). Being LGBT in Asia: Nepal Country Report. Bangkok.
- UNDP, USAID (2014d). Being LGBT in Asia: Thailand Country Report. Bangkok.
- 薬師実芳・古堂達也・小川奈津己・笹原千奈未 (2014). LGBT ってなんだろう?. 合同出版.
- 読売新聞 (2015). 性的少数者の働きやすい環境助言…LGBT 読本 (2015年8月7日) (URL: <http://www.yomiuri.co.jp/economy/job/news/20150731-OYT8T50028.html>)
- 渡辺大輔 (2012). 高校生に対する「多様な性」の授業の成果と課題：総合講座「人間の性と生」における実践より (【テーマ B-8】 ジェンダーと教育, テーマ型研究発表【B】, 発表要旨). 日本教育学会大会研究発表要項, 71, pp.236-237.